



「バードの道」は今

県境から置賜踏査同行

イギリスの女性旅行家、イザベラ・バードは今から約百三十年前の明治時代に本県を訪れ、置賜盆地を「アジアのアルカディア(桃源郷)」と称賛した。バードが旅したルートは現在、どうなっているのか。東京のまちづくりグループ「元氣・まちネット」が行った踏査に同行し、新潟県境から置賜までのバードの足跡をたどった。

(文)報道部・伊藤哲哉、写真(同)・色摩高幸

「見た明治時代の日本を知る貴重な文献となっている。」

▷1◁

イザベラ・バード(一八三二—一九〇四)は、イギリス・ヨークシャーの牧師の長女として生まれた。幼少時から病弱で、一八五四年には医師の勧めでアメリカ、カナダを訪れた。これを機に、当時の女性として珍らしい旅行家として世界各地を旅するようになったという。

「日本奥地紀行」によると、バードは旧越後米沢街道の十三峠を通過して新潟側から本県に入った。その道は今、どうなっているのか。東京を拠点に全国各地のまちづくりに支援を目指す「元氣師の勧めでアメリカ、・まちネット」のメンバーが、このほど三日間にわたり、新潟県境から小

出発から大里峠

新緑の樹林 頂上にお堂

一八七八(明治十一)年に日本を訪れ、東北地方や北海道を旅行した。二年后には、その体験をまとめた「日本奥地紀行」を出版。外国人の視点から同会の三人と、登山から同会の出発した。

「バードが通ったルートの現在の姿は、全体として検証されている。それを調べて観光などに役立てたい」と矢口さん。今は車道になっている部分をマウンテ

越後片貝駅から自転車 越え、本県側に入った。

自転車と徒歩で県内に



新潟県関川村と小国町の境界となる大里峠の頂上には大里大明神のお堂が立つ

で十五分ほどの地点から急坂を上り、さらに気持ちの良い林間を進むと、畑銅山跡に出た。今は人里離れた山中だが、第二次世界大戦中に栄え、ピーク時は二百人以上が働いていたという。そこを過ぎて間もなく、「大里峠入り口」の案内板に着いた。駅を出発して約一時間。踏査隊はここで自転車を下り、徒歩で峠に向かった。

細い山道はよく整備され、新緑の広葉樹林がさわやかだ。歩き始めて三十分ほどの所にある看板には、街道がにぎわったころに「峠の茶屋」があったと書いてある。さらに三十分余り進むと、大里峠(四八七m)に着いた。

峠の頂上は草地の小さな広場のようで、お堂も立っている。大里峠には大蛇伝説があり、関川村には毎年八月に大蛇パレードなどのイベントを展開。秋には小国町と関川村の住民が峠を散策する「大里峠越え交流会」が開かれ、親交を深めている。踏査隊は県境の峠を

「バードの道」は今

県境から置賜 踏査同行

▷2◁

イザベラ・バードが本県を旅したのは一八七八(明治十一年)七月。バードの著書「日本奥地紀行」には、新潟県側から雨の中、苦勞しながらいくつもの峠を越えたことや、置賜に入ってから最初の宿場があった玉川(小国町)では乗用馬の代わりに牛を提供されたことなどが書かれている。

はり玉川から道がつながる萱野峠(かやの)峠へと歩いて向かった。「萱野峠入り口」の案内板から数分で赤いつり

橋の玉川大橋へ。バードが訪ねた時代からの橋の位置は変わらず、旧越後米沢街道の三大橋に数えられたという。橋の上からは、切り立った谷とエメラルド色の川面、雄大な山々の眺望が広がる。隊員らは自然の造形美を目の当たりにし、しばしば見入っていた。

つり橋から少し登った所に「屋敷跡」、続いて「姥杉」「清水」と多くの案内板が立ち、旧街道のポイントを紹介してくれている。やがて峠道は敷石が並ぶ石畳の道に。案内板に「萱野峠敷石道」とある。「古道らしい風情がある。よく整備されていて歩きやすい」と、踏査を行ったまちづくりが

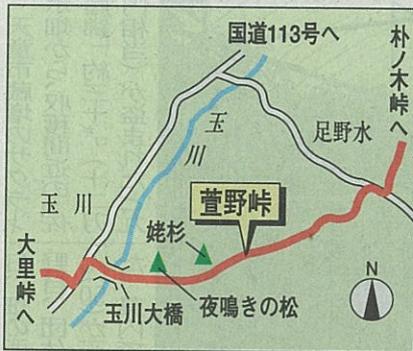
ループ「元氣・まちネット」(東京)の矢口正武代表(60)。萱野峠は、地元住民が二〇〇五年から復興作業を進めている。埋もれていた敷石を掘り起こし、旧街道の姿を再現。雑草を切り出し、石切場跡を

か、樹皮をせんじて飲むの道のり。ハイキングに最適な道で、整備に乗り出したの言い伝えがある「夜泣きの松」の位置が増えたという。頂上から東の足野水の集落までは一・七キロ。途中に炭焼き小屋の跡や、「黒滝」というきれいな滝がある。

低山は自然の宝庫。ブナ林を抜ける峠道を下り始めると、頂上付近でギンリョウソウという不思議な植物に出合った。やや透明感のある白色で、ユウレイタケとも呼ばれている。草花に詳しい矢口さんの解説で、ほかにマユミアブラチャン、ユキツバキ、ツタウルシ、ドクダミなど多様な植物を楽しんだ。

萱野峠

赤いつり橋 広がる眺望



新潟県境の大里峠を本県側の玉川に下った「バードの道」踏査隊は、や



美しい渓谷の眺望が広がるつり橋「玉川大橋」小国町

石畳に古道らしい風情

「まちネット」のメンバーで踏査に参加した山梨県甲斐市、会社員阿部智信さん(32)は、「萱野峠は昔の石畳などが垣間見え、歴史を感じさせる。一方で手付かずの部分も残っており、そこがまた魅力的だ」と目を輝かせた。

(文)報道部・伊藤哲哉
写真)同・色摩高幸

「バードの道」は今

県境から置賜 踏査同行

▷3◁



朴ノ木峠

イザベラ・バードのルートの踏査隊は萱野峠を東に下り、小国町足野水の集落へ。足水川に架かる橋に立つと、新緑に抱かれた山あいに民家が点在し、絵に描いたような山村の風景を見ることができた。

足野水は旧越後米沢街道の間宿(あいのしゆく)だった。間宿とは、峠越えの街道などで宿場と宿場の間に置かれた休憩用

の宿のことだという。地形的にも萱野峠と朴ノ木峠の中継点のようになっている。この家では、赤いツツジが鮮やかに咲き、庭先でワラビを干している。去年塩蔵し、食べきれなかったワラビを天日で干して食べるのだという。家の人に味を尋ねると、「モヤモヤ」として「うまいんだ」とニコニコ顔で答える。東京から来た隊員には(庄内出身の記者にも)謎の言葉だったが、おもしろい霧囲気は伝わってきた。

「名前通りホオノキが多いね」と、踏査隊を率いる戸沢村出身で「元気・まちネット」代表の矢口正武さん(60)東京

名前通り多いホオノキ



朴ノ木峠を登り切ると眺望が開け、飯豊連峰が姿を現した。大汗をかけた体を涼風が冷やす =小国町

飯豊連峰の全景に感嘆

都渋谷区。登り始めて約九八分に着いた。いきなり飯豊連峰の全景が視界に入り、隊員らは美しいパノラマに感嘆の声を上げた。

朴ノ木峠を小国側に越

な森林に遊歩道やバンカロー、広場などが整備されている。隊員の自転車を積んだトラックで先回りしたガイドの吉田岳さん(37)小国町大石沢の案内で、峠の頂上から林道をさらに上ると、飯豊連峰の展望台があり、その近くには朝日連峰も一望できるスポットがあった。

峠の頂上に戻り、「健康の森」側へ下っていくと、旧街道が遊歩道の一部になっていた。ここには歴史を感じさせる、こけむした石畳が残されている。「化物杉」と書かれた看板がある老木を通り過ぎ、バンカローが並ぶ場所に到着した。朴ノ木峠の踏査はここで終了。隊員らはマウンテンバイクや自転車で降り、峠といってもあまり高低差のない高鼻峠を経て初日の宿となる大滝温泉を目指した。

(文)報道部・伊藤哲哉
(写真)同・色摩高幸

▽4△

「バードの道」は今

県境から置賜
踏査同行

それ以上も運んでくる。この連中が、かわいそうに山の峠道を大弱りの格好で喘(あえ)ぎながら登ってくるのを見ると、気持ちが悪くなるほどである(「日本奥地紀行」に書いた)。

「会員や仲間に見光ルバードのルートを踏査した東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」の矢口正武代表(60)ら三人は初日、小国町の大滝温泉に宿泊した。話を聞かせてほしい」と、

「まちなネット」の他のメンバーからは「初めて昔の街道を歩いてみて面白かった。歴史があり、知的な楽しさを感じた」とポイントを紹介してくれるガイドがいればも

越後米沢街道は、大永八年(一五二一—一五二八年)に伊達植宗が羽越

国境に大里峠を開いたのがルーツとされる。その後、萱野峠、朴ノ木峠、黒沢峠などが次々と整備された。新潟側の住民は米沢街道、本県側では越後街道と呼んだ。

活用策語り合う

イザベラ・バードは、戊辰(ぼしん)戦争から十年後の一八七八(明治十一年)、十三峠を新潟県から置賜方面へ通過した。バードは「山形から自分の荷物を運んでくる商人たちは、実際に九〇から一四〇㍑、あるいは

矢口さんは戸沢村出身の造園家。「まちなネット」は、個人会員約四十人と法人

と楽しめる」といった意図を見出した。一方、「和ん話ん探検

兼続ゆかりの地を全国に



つづら折りの峠道を自転車で上るイザベラ・バードのルート踏査隊＝小国町

の掘り起こし作業を行った。斎藤さんは「全国各地の『歩こう会』の人たちを体験してもらいたい」と期待を込める。

さらに、旧街道を活用する新たなプランも。イザベラ・バードだけでなく、直江兼続の道として十三峠を売り込みたい」と、「山菜の学校」校長で小国町商工会青年部長の渡辺重信さん(36)＝小国町緑町。

隊」は、「山菜の学校」と名付けた体験型宿泊観光に取り組みなどユニ

クな活動を展開。県置賜総合支庁に事務局のある

萱野峠では先月、地元町の民の地域活性化への情熱は、踏査隊員らにしっかりと伝わった。

(文)報道部・伊藤哲哉、写真)同・色摩高幸

住民同士の連携必要

峠活用連絡会にも名を連ね、地元住民に呼び掛け熱は、踏査隊員らにしっかりと伝わった。

「バードの道」は今

県境から置賜 踏査同行

▷5◁

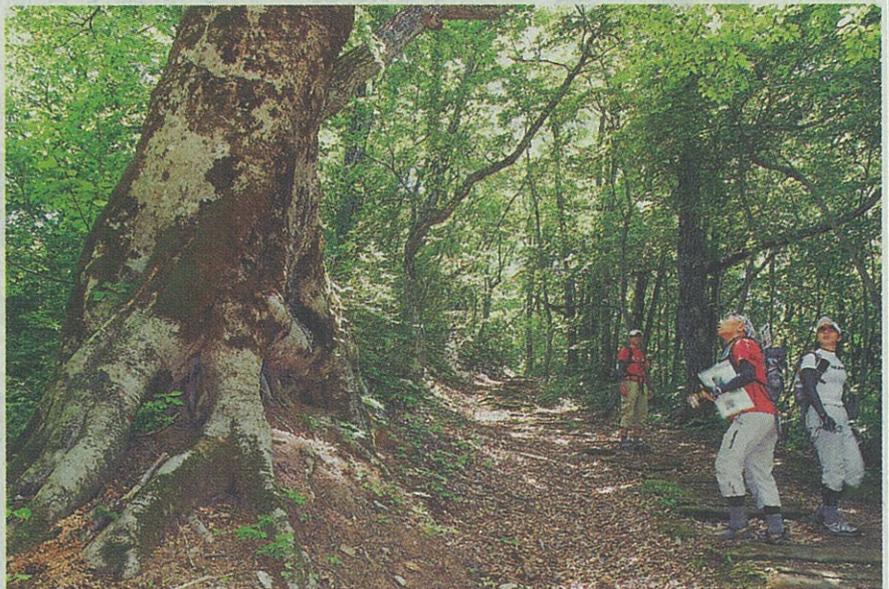
「イザベラ・バード」の「イキング日」だ。隊員らは「道」を探る旅の二日は、広場で自転車を降り、目、戸沢村出身の矢口正武さんから「元氣・まちネット」(東京)の踏査隊に、趣のある石畳の道がは、小国町の大滝温泉を出発。貝淵峠の長い登り坂をマウンテンバイクや自転車で越え、黒沢峠を目指した。

同町黒沢の集落から林道をしばらく行くと、少し開けた「お祭り広場」に出る。そこから先が黒沢峠の敷石道。この日も晴天に恵まれ、絶好のハ

子。道はきれいに整備され、入り口からの距離を示す案内板が二百メートルに立っている。「大フナ」や、茶屋があったという「古屋敷」、敷石を採石した「石切場(いしきりば)」などを通り過ぎ、峠の上(四六八段)へ。黒沢側の登り口から一六時。踏査隊は一時はどかけてゆつくりと歩いた。

黒沢峠の敷石道は、一九八〇年に黒沢地区の全戸が保存会を結成し、復元した。長年、風雪にさらされ、落ち葉や土に埋もれた敷石を、ボランティアなどの協力を得て一段一段丁寧に掘り起こした。十三峠復興の先駆けとなり、秋に散策やイ

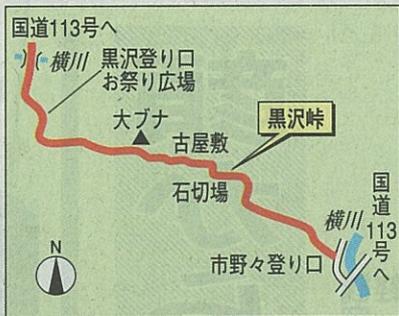
3600段、地区住民ら復元



ブナの巨木など豊かな自然を楽しめる黒沢峠。趣のある敷石道が続く

「ド」が書いた集落や峠の位置関係、距離などには疑問な点もある。明治時代に外国人が未知の東北地方を旅することはやはり厳しく、通訳を通じたやりとりにも誤解が生じたのではないかと、などと想像した。

踏査隊は黒沢峠を市野々へ下った。バードが「素敵(すてき)で勤勉な部落である」と評した市野々は横川ダム建設で水没することになっており、既に全戸が移転している。宿場の象徴だった「飛泉寺の大イチョウ」はダム湖予定地から移設された。黒沢峠の踏査を終えた隊員らは、たまたまワラビ採りに来ていた市野々の元住民、加藤菊夫さん(76)と小国町東原町と出会った。加藤さんは「四十年前には市野々に四十五、六軒の家があった。一九九一年に移転したが、今でもこの時期は毎日のように山菜を採りに来るんだ」と昔を懐かしむように語った。



黒沢峠

趣ある敷石道に感心

ベントを楽しむ「黒沢峠まつり」はリピーターも多いという。

イザベラ・バードは一八七八(明治十二)年七月に十三峠を通り、新潟県関川村の沼、小国町市

野々、川西町小松に泊まった。「日本奥地紀行」は、バードが妹に送った手紙をもとに書かれており、沼からここまでの距離は約三・九キロであるが、道をたどっていると、

「沼からここまでの距離は約三・九キロであるが、道をたどっていると、

写真同・色摩高幸

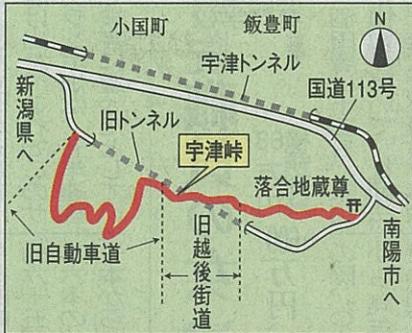
「バードの道」は今

県境から置賜
踏査同行

「数多くの石畳をのぼったり下ったりして高い宇津峠を越えたが、これが交通をふさいでいる一大山系の数多くの峠の最後のものであった。私は、うれしい日光を浴びている山頂から、米沢の気高い平野を見下ろすことができて、嬉(うれ)しかった。米沢平野(置賜盆地)は、長さ約三〇キロ、一〇ないし一八キロの幅があり、日本の花園の一つである」(イザベラ・バード「日本奥地紀行」)

バードが小国町市野々を出発した日は、それまで悩まされた雨も上がり朝から晴れていた。日本奥地紀行には「私たちは桜峠を越えた。そこから眺める景色は美しい。白子沢という山の中で馬を手に入れ、さらに多くの峠を越えて、午後手ノ道沿いの山は、さまざま樹木が緑の濃淡を描き、フジの花の紫が鮮やかに映えていた。この辺りでは珍しいというサイカチの大木も。歩き始めて四十分ほどの所に「宇

野を見渡したバードの晴れ晴れとした気持ちが表示されているようだ。戸沢村出身の矢口正武さんら「元氣・まちネッ」(東京)の「バードの道」踏査隊は、市野々から桜峠、オノ頭峠、さらに大久保峠近くを自転車で通過し、宇津峠を目指した。国道113号宇津トンネルの西側から旧国道に入り、旧トンネル付近へ。そこで自転車を降り、旧国道の先代の国道だった「旧自動車道」を歩いて宇津峠へ向かった。



宇津峠

置賜盆地の眺望を楽しむ



宇津峠の頂上にはさまざまな石碑が立つ—飯豊町

頂上に立つ石碑、標柱

津明神」の標柱があり、そこから細い山道に入った。米沢藩が設置したという「介(たすけ)茶屋跡」を通り過ぎると、少し開けた場所に峠の頂上(四九一)があった。小国町との境界を越え、飯豊町に入っている。宇津明神や道普請供養塔などの気高い平野を見下ろす。早稲、バードが「米沢から見えなかった。」「バードが来た時代には、こ

こに大きな杉はなかったのかも知れない」と、踏査隊のガイドを務めた吉田岳さん(37)「小国町大石沢。少し戻ると置賜盆地の景色が広がる所があり、隊員らは約三十年前にバードが通った峠からの眺望を楽しんだ。

宇津峠は、飯豊町手ノ子地区の住民が二〇〇五年から〇六年にかけて十数カ所に標柱を立てるなど、ハイキングコースとして整備を進めている。踏査隊は、「旧越後街道—大比戸に至る」と書かれた標柱から手ノ子側へ山道を下った。

巨木の「裸杉」を経て、再び平野の風景を展望できる場所に出た。その後、旧街道から雪崩止めに沿って旧自動車道を進み、また旧街道へ。下り始めて約四十分で宇津峠の踏査の終点となる落合地藏尊に到着した。隊員らは自転車に乗り、飯豊・川西両町の境界にある諏訪峠を通過して川西町小松へと向かった。

(文)報道部・伊藤哲哉、写真)同・色摩高幸

「バードの道」は今

県境から置賜 踏査同行

▷7◁

一八七八(明治十一)年七月、新潟から十三峠を越えて本県に入ったイザベラ・バードは、宇津峠から飯豊町手ノ子、松原、諏訪峠を経て川西町小松を訪れた。その印象を「小松は美しい環境にある町で、人口は三千、綿製品や絹、酒を手広く商売している」と日本奥地紀行に書いている。

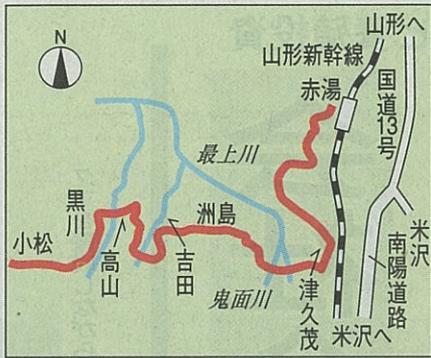
「米沢平野は、南に繁栄する米沢の町があり、北には湯治客の多い温泉場の赤湯があり、まったくと耕したというより鉛筆で描いたように美しい。」

当時の農村にヨーロッパ人が来るのは非常に珍しく、大騒ぎになったようだ。宿には群集が押しかけ、「私(バード)が押しかけ、(私)柿、杏、さくらを豊富に栽培している。実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディア(桃源郷)である」(日本奥地紀行)

県民になじみの深いこの一節は、上山で書かれた。「鉛筆で描いたように」と表現しており、高い場所から見下ろした眺めではなく、平野を通過して近くから見た風景を振り返ったらしい。

「バードの道」探索の最終日となった三日目、戸沢村出身の矢口正武さんから「元氣・まちネット」(東京)の踏査隊は小松を自転車で出発。行の記述に沿って最終ゴールの南陽市赤湯を目指した。

この日も天気は上々。



小松から赤湯へ

変わらないもの残したい



置賜盆地の水田地帯でバードのルートをたどった踏査隊=川西町

湯まで続く「アルカディアの道」をのんびりと楽しんだ。
矢口さんは三日間の踏査を終え、「新潟県境から赤湯までのルートは予想以上に整備されていた。標高差があまり大きくないので中高年の人たちも歩くことができる。全体を一つの観光コースとして売り込んではどうか」と話す。

「変わってしまったもの的一方で変わらないものがあり、今後も残していくことが大切だと感じた。ガイドも同行してくれて、すごく楽しい旅だった」と踏査隊員で会社員の佐野千晶さん(41)＝東京都渋谷区。二日目から踏査に加わった造園家、高橋靖一郎さん(40)＝東京都東大和市

水田地帯のんびりと

初夏の日差しを受けながら川西町黒川、高山、吉田、洲島と、広々とした水田地帯を進む。あいちくもやがかかっていたが、地形的には置賜盆地を囲む山々や南陽市のブドウ園なども見渡せるコ

ースだ。バードはこれらの集落やその周辺について「美しき、勤勉、安楽さに満ちた魅惑的な地域である。山に囲まれ、明るく

乗って四日幅(一日は約三十キロ)の道路を四時間ほど、これら美しい村々を通過して進んだ」と書いた。

田んぼではなく、もっと雑多な作物を植えていたのだろう。立派な道路が整備されていてバードを驚かせた「津久野」は高島町津久茂か。踏査隊は鬼面川、最上川の橋を渡

「私たちは馬に」
「文」報道部・伊藤哲哉
写真真向・色摩高幸
おわり